重大なる決心[[1]](#footnote-1)

―朝鮮の知識人に告ぐ―

香山光郎

【1】

必然且つ當然の道

半人は重大な決心をしなくてはならない。それは半人全としての重大決心であるのみならず、實に各人、各家としての重大決心でなくてはならない。この決心何によつて半人の一人、一家、及び全のが別れるのである。

その重大な決心とは何んであるか。それは、われは、天皇に歸一しまつらん、といふことである。然とに、天皇のとなり切ることであり、しかもこれはのつぴきならぬことであつて、かうしてもいゝ、あゝしてもいゝ、しなくてもいゝといふやうなのものではない。必らずさうならなくてはならないの、必然當然の歸である。

ところが一ではまだ、かゝる決心どころではなく、かゝる認さへ足らぬものがあるやうであるが、このからこそ大なる不は生ずることであらう。

無知と誤解

朝の人たちが、かゝる必然當然の道を認しないのは、日本に對する無知またはによるものである。日本の、日本の意圖、日本の力を正しくしてゐないからである。實半人は日本がつてゐない。從來等は愚かにも日本を知らうとする力を持たなかつた。五十年來東京の各學校で數萬の人がをけながら、日本のとか學とか、日本の風とかとか、さういふものを學んだものはどいなかつたといつてもいゝくらいであつた。今日においてさへ、等は、眞目に日本を知り、その道を學ばうとしないのである。これは實に愚かなことであり、気のである。

朝の學生たちは米やロシアのことを知つてゐるをりとしてゐるが、日本のことは知らないのをりとしてゐるかに見える。しかも、自分は日本を知らないとはつてもゐない。日本のことは何でも知つてゐるとつてゐる。知らないで知つてゐるとうくらいなことはない。自無知者、者でありながら、その間違つた認を人にへるから大なことになるのである。にいへば、今日の半人はすべてといつていゝくらゐに國日本に關して無知である。無知なだけならまあいゝが、してゐる。祖國日本のも意圖も力もしてゐるのであつて、かゝる恐るべき結果を來たした罪は、實に朝鮮の知識階級にあるのである。（『京城日報』1941年1月21日）

【2】[[2]](#footnote-2)

誤解の主なるもの

半人が國日本に對するの因をなすものは、國家意表を直に取らぬことである。内一といふことさへも、そのまゝ直には取らず、何か利用せんとすることあつての一種の政かのやうにして自ら賢しとするのである。

これは大御心が日本の國家意であることを知らぬためのであることをたない。無限の御と無邊のをじまつらぬ頑な心のであることである。半人は須らく直に爲政者のことばを取るべきである。直でないといふことは、それ自に道である。人のいふことを直に取らないで、その裏をすることは決して賢いことではない。はかくすることによつて自分を欺き自分を害ふのである。

一同は、讀んでのく、その御ことば通りであり、内一もさうである。このことばは或者たちの取るがく、一時の政でもなければ、まして南限りの標でもない。これは實に、國の國のから發したものであつて、もしもこれがになるやうなことがあるとしたら、に信用すべきものはないであらう。

半の人たちが、かやうにふべからざるところにひを持つのには者に特の猜心のにがある。それは、米など自國内においてはだ高き道をしながら、異に對する時はをことゝするといふにある。要するに現代國家が外國又は異に對するなどは一これをつて當てにしない方がかしこいことであつて、これをに信じてかゝるのは幼稚な愚直で、警戒さるべきものだと見るのである。これは英國の度人に對しての、または米國のフイリツピン人に對しての從來のいくつかのにおいては、に眞であつた。しかし、之を日本が半人に對する場合に、適用せんとする時には二つの大きなをすのである。即ち、一は日本の國が諸外國とつて、その政治はすべて大御心の現はれであつて、決して諸外國のやうに唯利な數をする國ではないことを認しないことであり、二は半人は今や國人でもでもなくして　天皇の赤子であるという事實を無したことである。

日本は内人に對しても外國に對してもをいひ、のをする國ではない。それは日本の自定であり、日本の國の上あり得べからざることであるからである。半人は韓國時代より、日本のこのを認する眼を缺いて、に對してはといつたやうな心のためにに對するをもつてしたがために、の悲しいをした。今日では蔣一が正にその轍をんでゐる。等が日本の眞意、ち國により必然的にされるところの眞實を認したならば、日支間の今日の不はなくてんだはずである。

然るに半人の中にいまだ、ふべからざるものをひ、信ずべきものを信ぜずして、等のかしき先の過を返さんとするものを見るのは、なんと心元ないことであらう。

はく朝の同にしたい。國日本に對する、あらゆる疑ひの心をてゝ赤子の母にすがるがく、直にその國に己をぜよと。かくすることによつてのみ半人ははれる。國の眞意にをはさんだりすることが、そのこと自不忠であることはいふまでもないが、そのは大なる不のを取つて、半人全の上に降りかかつて來るにひない。（『京城日報』1941年1月22日）

【3】

　　最後の決心

半人は國に關する二や二心をてなくてはならない。「もつて國に報ぜん」を地で行かなければならない。國をげるとき、陛下の萬をへまつるとき、神社に參するとき、會に出するとき、すべてをのからき出づるによつてなすべきである。かりそめにも國家の眞意に對してをむやうな言動があつてはならない。そんな考へをもこそぎきてることこそ、半人全をし、その福利を増する所以であつて、これにすることは國家や朝同をすることである。

これは二千四百萬の半人全にいふことであるけれども、特に知人のをすことが事であり、火事である。數萬の知の半人のはに重大である。等が、今日正しき認と心へをもつてしたならば、内一のため、半人の上のため、素晴らしいを上げることだろう。國及、日本神及、力、生力向上のためのき使となるであらう。そして朝をして大なる精神力、生力を發せしめることによつて、國上、上國家にするところめて大であらう。國新參者としての半人としては、國家のためにをしを□んずるために、今日の非時は實に千載一の[]である。知人等の、不實のために、見す見すかゝるなる會をすることは、國日本の不なることいふをたぬが、半人自のためにはを千載に殘すことゝなるに定まつてゐる。

まして、知人が、相らず、色のな、日和見な度をることによつて、朝がこの發しなければならない力を發することが出來ないものとすれば、等知人は、自分等がするとしてゐる朝同をば、取返しのつかない大不に引きずり込むといふろしき責を負はねばならない。等は日ならずして、等の生まれた日をひ、等の母たちが彼等[を]はらんだ日をむことにすべきは必然の歸といはねばならぬ。

かやうなわけであるから今日の朝の知人としてるべき道は一つある。しかしてそれは唯一つに限るのである。ち大一番の大決心により、ある日本人として生し、朝のと力、生力上のために、一兵卒の心へで力することである。

まづ國、子のたると邪の心をかなぐりすてゝ、直な心になることである。のいふことを直にけ入れるやうにすることである。日本のを直にけ入れ、國を直にけ入れ、長や町代のいふことを直にけ入れ、畢竟、あらゆることを直にけ入れる心とならなければならない。

この直な心で國日本の道を學ぼう。を學び、學を學び、風、、特に作法を學びはう、直な心はの心であり、の心であり、の心である。日本に關するあらゆるものをわがものにし、これをし、これを大事にする心である。そして、地だの新だの、民族だのさういふことを一切水に流して、日の飜へる所をすべてわが國土とひ、その國土にんでゐる　陛下の赤子をすべて同[と]認してこれにわれらのを注がう。要するに、日本のものなら何でもして、なんでもわがものにしよう。

この境地に達した時にわれわれはすべての氣拙さや不安から解して、新しい矜持ととに輝くことゝなるであらう。まづ自分自をかやうに、全な一人の日本國にき上げて、次ぎには同をへくのが知人の光ある、き甲斐のある職であるべきである。（『京城日報』1940年1月23日）

【4】

　　危機を見よ

　は決心如何によつて半人の一人、一家及び全のが別れるといつた。これは何を意するか。

はてこれを半人のと呼びたい。それはにであるからである。

事つてに第四周年に入つた。日本は今や以来未の國を切開きつゝある。この國たるや、大なものを生まんための國ではあるが、それにしても國は國であつて、この未の國を服して、アジヤの日本神造のを成するためには、實に、通り一一心で、出し得る限りの最大力を出さなければならない。いはゆるの手も借りたい時なのである。かゝる時に於いて、もし國の一が、を以て國に對し、、日和見の度を持するものがあるとすれば、それは正にサボタージユともいふべきであらう。かゝる分の國に對して下さるべきが何なるものであるかはの要もないことであらう。それは最なるものでなければならない。

然るに今日朝にはかにかゝる一がする。等は知人、産にするものであつて、いまだ内一の本國に對し、そのと眞實に對してをき、だしきに至つてはをなして心の歸をはしめてゐる。しかも等は從來、一や青年にされてゐたであるだけに、等の動の及ぼすは大なものがある。

然らば何が故に等は今年古りたるかのからめぬのであるか。余はてする。それは日本が等に正しく認されてゐないためであると―日本の國が、日本の使が、日本の力が。であるから、何かの方法で、等が國日本の眞のを認めるやうになれば、等は必ずや、國家のためにももげるやうな人物になると信する。

だからは當に對しては、これらな半人に得心の行くやうに、日本の眞のをしてくれることをおひしよう。そして朝の知人には、今直ぐ、出直して、國日本の眞のを摑むために學をめることをおひしよう。は知人諸に、たつた一つのことをすることが出來る。それは自がさうであつたく、諸は日本を知らないと、或はしてゐると。諸は日本のを知つてゐるのか、日本神の何たるかを眞面目にしたことがあるのか。事や支事がどうして、なぜ起つたか、日本は何のためにつてゐるか、日本は朝をどうするつもりであるか。日本の國家目標は何か、日本の眞の心、日本の眞の力は何か。これらの問をけた時にはして自信を以て説明が出來るとふのか。

朝の知人諸は、何よりもまづ日本を學ばねばならない。從來のと邪をてゝ、日本に對するあらゆる先入觀をてゝな、直な心で日本を認しなければならない。道學會は實にこの目のために立されたものである。

諸はな人物であるがに、國日本の眞意がり、半人の役がつたならば、必らずびんで、國のために生をつことと信ずる。諸は一日も早く諸がする半を正しき路にく力くももしき導者とならねばならない。

しかも、この、日本を學ぶことはを要する。一日も早くわれわれが日本を知り、道を學んで、現在行しつゝあるのために、われわれも分のをしなくてはならない。われわれはまづよく國日本を知りその道を學んだとなつて、二千三百萬のの同胞をへいて、一一心に加はらなければならない。もし諸のがれて、後三年も今日のやうな生暖かいがするとせば、國家は「けしからん、半人は當てにならぬ」とするやうになるかもしれぬ。（完）（『京城日報』1941年1月24日）

1. 『京城日報』1941年1月21日~24日連載。第3回までは夕刊3面に、第4回のみ朝刊4面に掲載された。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 【2】と同じ内容の文章が1941年1月26日付『東亞新聞』「半島通信」に「重大なる決心　朝鮮の知識人に告ぐ（一）」として掲載されている。『東亞新聞』は在日朝鮮人を対象に日本語で発行された新聞で、名古屋に本社を置き1935年から1943年まで刊行された。復刻版として『戦時下在日朝鮮人新聞資料　東亜新聞全三巻』（緑蔭書房1997）があるが、収録されているのは（一）のみである。『京城日報』で解読が難しい部分はこの『東亞新聞』復刻版を参考にした。 [↑](#footnote-ref-2)